

随想

佐伯海軍航空隊と佐伯市

加藤 策 二

(会員 佐伯市木立)

今年、戦後七十年を迎える。

戦前戦中を通して佐伯市は大きく変貌した。昭和六年（一九三二）海軍省で九州東岸の地に航空隊を設置するための予算が計上され、その候補地の一つに佐伯が選ばれた。他には大分郡日岡村、宮崎県富高、鹿児島県志布志が候補地として上げられた。

佐伯町では、同年二月町議会で海軍航空隊を誘致することを満場一致で決定した。翌七年には佐伯航空隊建設の為に工事が始まり長島、女島、中江が埋め立てられ道路も拡張された。この工事には港湾の水野組を始め、大林、鹿島、清水、西松、間等の各組、地元出身の星野組、村上組も携わっていた。労務者に徴用ではない朝鮮からの人々が大勢来ていた。なかには朝鮮人を毛嫌いするもの

もいたが、私の父は意に介せず貸家三軒を貸していた。隣の分家の貸家にも朝鮮出身者がいた。私は朝鮮の子供達と同じように少年期を過ごした。

昭和九年（一九三四）の工事が完成し、十二年には佐伯海軍航空隊が開隊した。



佐伯海軍航空隊図

佐伯航空隊が出来て今年で七十八年。早いものである。

友とすごしたあの頃の様子を思い起こし、作成した冊子
「朋」よりその一部を抜粋紹介する。

幼稚園児の時に佐伯海軍航空隊が開隊。我が家の前、県道を挟んだ所の豊豫要塞司令部佐伯築城部隊（佐伯湾鶴見半島の丹賀砲台に日露戦争後建造の巡洋艦伊吹の主砲を設置）に大分憲兵隊佐伯分駐所が出来た。隊長は松下曹長といい、同級生の女の子がいて隊内で生活していた。二年程でかわって行った。

この豊豫要塞は、大正八年（一九一九）の要塞整理要領にともない新たに新設された要塞である。翌九年（一九二〇）広島陸軍築城部本部の豊豫支部として佐賀関に作られた。大正十五年（一九二六）豊豫要塞司令部が佐賀関に新設され豊豫要塞重砲兵連隊が配備された。佐賀関に置かれていた築城部豊豫支部は佐伯に移された。

この豊豫要塞の守備範囲は、初めは佐賀関の高島、対岸の佐多岬を中心とした豊後水道を防衛するものであったが、次第に拡張され坂ノ市、下の江、臼杵、佐伯の範囲もその要塞圏に含まれるようになった。丹賀砲台（現丹賀メ

モリアルホール）、鶴見崎砲台、同防備衛所、大島砲台が作られたのもこの時期である。



鶴見崎第一砲台跡

丹賀メモリアルホール・鶴見砲台跡

昭和十二年（一九三七）七月、中国盧溝橋で北支事変が起こり中国での戦争が始まった。

九月、第十軍六師団大分四十七連隊は保定攻略・永定河渡河作戦に参加多大な損害を出している。隣の区、臼坪の素封家、幸木中尉が戦死された。息子さんは数え五歳、妹は二歳だった。父は町葬後、佐伯東尋常小学校奉安殿前

に立派な楠公銅像を献納している。我が区佐伯町蟹田では吉村・田中両上等兵も負傷、その後亡くなっている。

十一月になり、戦死者の町葬が頻繁に行われた。父が蟹田五十数戸の区長故、母親は区民の国防婦人会員の中から近い人数名にお願いし、憲兵隊前よりバスで大手前へ行き、さらに三百メートル程歩き佐伯小学校校庭の斎場に駆けつけた。私の住む蟹田地区でもこの年五名の人が戦死、戦病死した。

佐伯町での町葬には佐伯小学校、佐伯東小学校二校の四年生以上の小学生、中学校（現高等学校）、高等女学校生徒、町、県の吏員等大勢の人々が参加し、しめやかな中に盛大に取り行われてた。一度に数柱の葬儀だった。

昭和十二年（一九三七）七月以降、母親や女学生だった姉たちは、佐伯からの出征兵士送りや佐伯駅を通過し門司港に行く宮崎県高鍋騎兵連隊、都城歩兵連隊兵士への湯茶の接待に追われていた。

五月二十七日の海軍記念日には佐伯航空隊では隊内見学、酒保（航空隊内の酒場）の解放。多くの市民が格納庫にある九六艦戦（艦上戦闘機）や飛行艇などを見学してい

た。練兵場では近隣小学校の対抗競技、女学生のマスゲーム、中学体操部の器械体操、実業団対抗リレー等が行われた。東小学校児童は常に優勝していた。昭和十三年の海軍記念日だったか明確ではないが、源田サーカスと呼ばれていた源田実少佐傘下のアクロバット飛行隊が九六式艦上戦闘機で妙技を披露していた。その内の一機が背面飛行で低く飛びすぎ水上班の防波堤標識灯台にぶつかり黒煙を上げ炎上した。隊内見学や競技会は急遽取りやめになったことを覚えている。

昭和十四年（一九三九）憲兵分遣隊が出来る。隊長は吉原准尉、官舎は佐伯中学校（現佐伯鶴城高校）の旁らにあり、同級生の息子がいた。隊員は五名、馬二頭、用務員二名、馬の調教師もいて隊は充実していた。

昭和十五年（一九五〇）東京で開く予定だったオリンピックは取りやめになった。替わりにヘルシンキが候補に挙がったが、これも戦乱のため中止。世界は、いたる所で戦火が広がっていた。

日本では紀元二千六百年記念でわきたっていた。国民は檀原神宮参拝、皇居へ祝賀に袖を連ね踵を継いで参詣

した。交通機関はそのため大変な混雑だった。十月に皇居前で盛大に祝賀会が催され各県対抗の体育大会が神宮外苑で数日にわたって開催された。私の従弟も青年部陸上競技百メートルで三位になっている。この従弟も終戦の年に十九歳で徴兵され満州（中国東北部）で戦死した。

二月、故郷佐伯湾に演習中の第一、第二艦隊が集結、大阪湾より上陸し二月十一日畝傍山に参詣している。

同じ頃、神話「神武東征伝説」の一つ「神の井伝説」。その昔神武天皇が使われたと思われる「おきよ丸」が日向の美々津港を船出し佐伯の大入島に來たが、水を補給するにも水がない。神武天皇が日向泊の浜に弓を突き立てると水が湧き出したという。その想像図を日展無審査の菅一郎先生が描いている。この原画は佐伯中学校（現佐伯鶴城高校）の校長室に掲示され、校歌の中にも「大入島にその昔、神武の帝東征の、御船繋（みふねづな）がせ給へりし、巨巖（こゑん）そびえて今もなほ、神の御稜威（みかさゐ）のいちじるく、みもひの古井清水湧く。」と書かれている。昭和四十年代、その遺作をもとに佐伯文化会館の綴帳（じゆんちやう）が作られた。



皇祖東征舟泊紀年

この月、ドイツヒトラークレーン（クレーン）の若者が來日、宮崎神宮参拝と八紘一字の塔（現平和の塔）見学の上、佐伯に立ち寄り、佐伯の小学校六年生、中学生、高等女学校の児童生徒が佐伯駅頭で歓迎している。

四月には、砂糖、米、マッチ等の生活品が配給になった。日常は麦飯や大豆粕（とうりやん）や高粱（こうりやん）を食べ、副菜には北で採れる鱈などの古い魚が配給されていた。終戦の詔書に「耐へ難キヲ耐へ忍ビ難キヲ忍ビ以テ万世ノ為ニ……」とある

が、既にこの年から国民は堪え忍んでいたのである。

特に気の毒だったのは、老舗の衣料品亭主たちだった。七月に高級織物、貴金屬販売を制限する七、七禁止令が発動され、十月には私の中学時代の先輩、呉服店や米問屋の主人達が徴兵された。軍は臼杵、佐伯、下の江の大きな造船所三社を合併させ、五百トン級の本造船を造る東九州造船所を造らせた。その工場の帳簿付けに引つ張り出されたのだった。この造船所で造られた本造船は瀬戸内海周辺に撒かれた磁気機雷避けや、大洋での防空監視船などに用いられたという。

昭和十五年夏、第十二試験艦上戦闘機が正式採用となり、その年の紀元（皇紀二六〇〇年）をもとに零式艦上機（零戦）と命名された。佐伯の空は米機に備え多くの戦闘機が配置された。早朝より訓練が始まり、夜間には標識灯をつけ三機対四機、或いは吹き流しをつけた標的に二〇ミリ機関砲で射撃したりする等の猛烈な訓練が実施された。休みなしの月月火水木金の日程であった。私たちはこの騒音の中、窓は開けられず暑い夏を過ごした。六年生の時の教室は二階だった、夏は男子が南側冬は女子が南側で過ごした。授業は六時間、一クラスは六十人すし詰め

だった事を覚えている。

あれは十五年の十一月だったと思う。東尋常小学校は県小学校対抗競技大会で男女とも総合優勝した。競技会が終わり放課後練習していた生徒も一緒に行動できるようになると全校生徒での行軍が行われる。六年生は四十キロメートル程歩く。足下は藁草履^{わらぞうり}履き、鼻緒で足がよく食われ血がにじんだ。草履は一ヶ月も持たなかった。紅白の運動帽、水筒と握り飯に梅干し・沢庵、肩に掛け歩く。当日は快晴だった。海軍戦闘機は既に早朝より訓練に励んでいた。八時ラジオ体操、校長の訓辞が終わり学年毎に目的地に向かって出発しようとした時、赤い火の玉が進行方向、裏門の百メートル先に落ちてきた。乗員の武本一等飛行兵は落下傘で下りた。空戦相手の隊長機は町中を避け長島川に墜落殉職した。武本さんはまもなく結婚。緒戦台湾高雄からフィリピンに出撃、南方各地の戦線を転戦し南太平洋海空戦で戦死している。戦後息子さん二人は母親の実家切畑に引き上げた。

猛訓練により毎週のように事故が発生し、海軍のトラックがラッパを吹き鳴らしながら救援活動に取り組んでいた。憲兵は馬を飛ばして現地に行った。また、防備隊の

艦艇に緊急呼集があり、トラックで「〇〇艇出、港乗員至急戻れ。」と市内を呼集していた。あわただしい毎日であった。

我が家は父の死後、土地が軍需部の引き込み線（現緑道公園）の一部にかかり手放すことになった。貸していた田んぼ五反歩を叔父に買ってもらい、その金で二階建ての職場を改装し第三十八哨戒艇乗員の宿舎に提供した。二十数人の下士官、兵隊を住まわせていた。母は兵達さんたちの昼夜の食事作りで疲労していた。

昭和十六年十一月七日、機密聯合艦隊命令作第二号、「第一次海戦準備ヲナセ Y日ヲ十二月八日ト予定ス」との命が下った。旗艦赤城、長門において各級指揮官、幕僚にハワイ作戦を明示し、翌日から特別訓練が実施された。九州有明湾を出港した六隻の空母は警戒態勢をとって南下、二百五十海里隔てた地点から佐伯湾にある聯合艦隊めざし第一攻撃隊（淵田中佐）、第二攻撃隊（島崎少佐）を発進、偽装爆弾や模擬魚雷による攻撃の演習を行った。訓練三日目には標的艦長門に向け、艦上攻撃機で攻撃実戦訓練に励んだという。

十一月十八日、旗艦赤城は佐伯湾を抜錨、正午過ぎには第二航空戦隊蒼龍、午後二時には第八戦隊の重巡利根、筑摩が、その他第五戦隊の瑞鶴、翔鶴は別府から、長崎を出航後佐伯で飛行機を収容した空母加賀が相次いで戦地に出ていった。真珠湾攻撃への出発である。

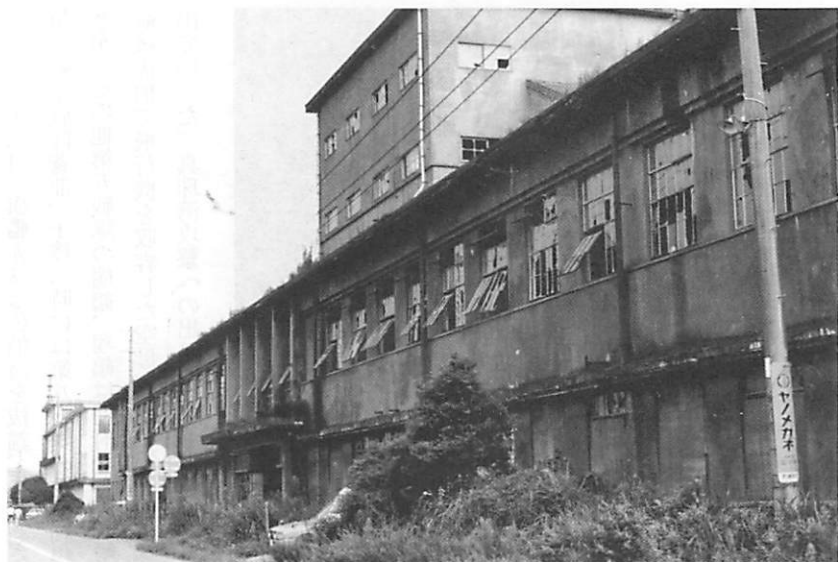


聯合艦隊機動部隊真珠湾攻撃発進の碑



今も残る佐伯航空隊掩退壕（佐伯興人数地内）

このように佐伯航空隊は、第二次世界大戦における重要な役割を担っていた。私たち家族もこの時代の中を生き抜いてきたわけだが、戦後七十年の今の平和な時代を考えると、二度とこのような時代が来ない事を望む。



在りし日の佐伯海軍航空隊兵舎跡